

2021年7月31日（土）

老球の細道623号

7月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

物事をなかなか決められない例えを「小田原評定」と言われる。新型コロナの変異株が猛威を振るう中で東京五輪が遂に開幕した。私が五輪決断の当事者であったらどうしたか、私も毎日が「小田原評定」だった。途中でやめるわけにはいかないが、「あきらめる勇気は命を救う」道もある。まだまだこの国のリーダーの決断をしかと見届けていきたい。

1・テレビから

◆「私にとってただ生きているということは意味がないのだ。いかに生きるか、生きていて、それがどう意味があるのかということだけが問題なのだ。私は今も戦っている。病魔とも、世界の平和とも、東京オリンピックとも」〈NHKBS『映像の世紀』：1940年東京五輪招致に命をかけて尽力した嘉納治五郎。戦時中開催反対の中、なんとか東京開催を確認したカイロ会議から帰国する船での言葉。嘉納はその船で死去し、五輪は軍部の反対で返上された。

◆「隠退という言葉はこの世で一番厭わしい言葉だ。自分が選ぶにせよ、運命がわれわれを強いるにせよ、隠退して自分の仕事、われわれをしてわれわれたらしめる仕事を放棄することは墓へ降りることに等しい」〈NHK・『100分de名著・ポーヴォワール・老い』：文豪ヘミングウェイの言葉である。悠々自適な生活が幸福だと思っていたが、やはり死ぬまで仕事ができること。好きな仕事を続け、他人様に役立てばこれ以上の幸福なし。

2・読書から

◆「こんな不幸のどん底に落ち込んだ人間には勇気という手段が残っているだけである。思い切ってやるだけだ」〈スタンダール『赤と黒』集英社〉：人間どん底に沈んだら、その下はない。後は思い切って底を蹴れば浮き上がるだけだ。昔観た映画でも言っていた。

◆「意味ある人生とは情熱をこめた生き方をすることである」「首尾一貫した生き方をし、考え方をすることは誠実さにほかならない」〈『人類の知的遺産・マックス・ウエーバー』講談社〉：あのマックス・ウエーバーにしても人生において重要なことは「熱意」と「誠意」と言う。わが“意”を得たり。この夏、暑さより、さらに熱くなって事に励みたい。

3・TOKYO2020+1から

◆「失敗したことがない技で失敗する。これだけやってきても、まだわからないことがある。おもしろさしかないですね」「今までで一番うれしかったのは、鉄棒でけ上がりできたときだ」〈朝日：体操・内村航平〉：金メダルより蹴上がり。ジュニアの指導は重い。

◆「大学3年のときに強化合宿のメンバーから漏れた。泣きじゃくっていたら、平井監督に『もっと速くなって僕を困らせてくれ』と言われた。『本当に困らせますよ』と赤い目で返した。その翌年、世界選手権で銀メダルを獲得した」〈朝日：水泳・大橋悠依〉：日本水泳女子史上初の金メダル2個を達成した大橋選手。その大器晩成の過程には名将との絶対的信頼関係があった。「平井先生に拾ってもらって、よかったな」とも語る。コーチ冥利だ。